

増田渉直筆注釈本の内容について

— 増田渉の翻訳活動に与えた影響を中心に —

東 延 欣

Research into Wataru Masuda's Book-Focusing on the Impact of his Translation Accomplishments

DONG Yanxin

Abstract

Wataru Masuda is an outstanding scholar of Chinese literature. He is known as a pioneer, who investigated the works of Lun Xun—a writer and a thinker of Modern China.

Masuda gained fame for his paraphrased translations of the writings of Lun Xun and other Chinese novelists. Following an introduction arranged by Haruo Satou, an old friend of Lun Xun, Masuda went to Shanghai in 1931. He visited Neishan Bookstore every time, Lun Xun was there. From the very start his intention was to translate. He started asking questions about Lun Xun's *Zhongguoxiaoshuoshilue*. His most cherished collection of Lun Xun's books includes 'Nahan', 'Phanghuang' and last but not least 'Zhongguoxiaoshuoshilue'. These were used as textbooks during his private lessons with Lun Xun. During the course of his lessons Masuda kept diligent notes of what he was learning. He completed the study of 'Nahan' and 'Phanghuang' in just one year. As a student Masuda could have well communicated with other researchers, but he chose to communicate directly with the master, therefore it is without any doubt that this experience is vastly superior compared to other researchers of Lun Xun's works. In my opinion Masuda's notes provide a great insight for any future research translators of Chinese literature. This essay presents the transcript of Masuda's notes and evaluates the invaluable effect of Masuda's translations.

Keywords: 鲁迅, 増田渉, 直筆注釈, 資料研究

はじめに

増田渉は大学在学中から魯迅の『中国小説史略』について深い関心を持っていて、中国小説史の画時代的な名著であると考えていた。著者は優れた学者であるという尊敬の念が、青年の頭に深く植えつけられたのである。中国小説の翻訳の仕事をしている間に、中国へ行って勉学に励みたいという思いが強くなり、上海に行く決心をした。1931年3月20日から、同年12月末までの10か月の間に、魯迅から直接指導を受けた。増田は『魯迅の印象』という本の中で、魯迅が内山書店に訪ねる時間を見計らって出かけ、『朝花夕拾』と『野草』について質問する毎日を送っていたが、話題が『中国小説史略』になると、魯迅宅に直接出かけるようになった。それから、魯迅の書齋で『中国小説史略』を教科書にして、毎日3時間ほど魯迅と膝をつき合わせて、『呐喊』や『彷徨』の解説を受けた。こうして増田は著者である魯迅自身から『朝花夕拾』、『野草』、『中国小説史略』、『呐喊』、『彷徨』について直接解説を受けることとなった。

関西大学図書館に保存している『呐喊』や『彷徨』の1930年刊烏合叢書版には、注釈の書き込みがあり、これはおそらく魯迅から親しく講義をうけた時のものと推定され、増田が翻訳に使用した底本にもなった。さらに、これらの本に残っているメモから、魯迅が増田渉の翻訳活動に与えた影響、魯迅と増田渉の師弟間の交流と感情、魯迅について研究、特に魯迅の内なる一面の研究にも繋がる。国境を超えたこのような学問的、人間的な交流の広さと深さを明らかにすることによって、魯迅文学の意義への理解を増すことができる。魯迅文学の日本語訳の改善及び日本における更なる普及である。そして、魯迅の翻訳理論と増田の翻訳方法に与えた影響を解明することができる。

一 注釈メモの内容

1. 難読な字句の解釈

増田渉が上海に行った最初の動機は、大学を卒業した後、中国小説の翻訳の仕事について関心を持ったことであった。それにより中国に渡る気持ちが強くなったことで、上海に行く決心をした。1931年3月20日から、同年12月末までの10か月の間に、魯迅から直接指導を受けた。中国の小説を翻訳するため魯迅の指導を受けたため、日本人である増田にとって一番難しいのは難読な中国語の字句であったと考えられる。

筆者は注釈本『呐喊』と『彷徨』に残っているメモを解釈を試みたが、その中で最も困難であったのは難読な字句の解釈である。

表 1

原文	メモ
魯鎮的 <u>酒店</u> 的	居酒屋
<u>格局</u>	やり方 方式
一個 <u>曲尺</u> 形的	かね尺
<u>傍午傍晚</u> 散了工	午ごろ
每每花四文銅錢	費す
每碗要漲到十文	高くなった
或者茴香豆	茴香と豆を煮たもの
就能買一樣 <u>葷菜</u>	生ぐさもの 肉 or 魚
多是 <u>短衣幫</u>	短衣組
大抵沒有這樣闊綽	散財する
當夥計	小僧 丁稚
樣子太傻	ばからしい
怕 <u>侍候</u> 不了長衫主顧	もてなすことはできない
雖然容易説話	接待し易しい
但 <u>唠唠叨叨</u> 纏夾不清	面倒くさい
從 <u>鑊</u> 子里	瓶
舀出	汲出す
<u>掌櫃</u> 又説我幹不了這事	水を入れる
幸虧 <u>薦頭</u> 的情面大	推せん
整天的站在櫃檯里	終日
雖然沒有什麼 <u>失職</u>	しくじり
一副兇 <u>臉孔</u>	顔

「孔乙己」の21、22ページを例に挙げると、以上の2ページのメモの内容はほとんどが品詞の解釈であり、名詞、動詞、形容詞などほぼ全てを含めている。上記の表の通り、増田が書いている解釈はほぼ原文の意味を正確に翻訳していると考えられる。増田のメモより、魯迅が一字一句丁寧増田に説明していることがわかる。

2. 文章の内容についての解釈

魯迅が増田に教えたことには難読な字句、言葉の本来の意味だけではなく、難しい言葉の裏の意味、文脈によってのみでは理解できない部分も含まれていた。

表2

原文	メモ
引車賣漿者流	林紓 蔡元培
那一定是阿桂了	○桂月（八月為桂月）
现在是他的儿子了	阿 Q
但他既然错	阿 Q
若敖之鬼餒而	氏の名 子孫がないと
趙大爺	趙大爺（子）太爺（祖）
我手執鋼鞭將你打	「龍虎鬪」といふ芝居の中の文句 宋朝の故事
好麼	（お前の氣すむんだらう）
叫得他答應你麼	大根にきいてみて 大根に答へてもらうがない

上記の表は『阿Q正伝』に残っているメモから文章の内容についての解釈を選んだものである。例えば、「引車賣漿者流」の隣に、増田は「林紓 蔡元培」と記している。「引車賣漿者流」とは、旧社会の人力車の車夫や行商など、社会的な地位が低い人々である。「引車賣漿者流」という言い方は1919年に林紓が蔡元培に送った手紙である「致蔡鶴卿太史書」に初めて記された。林紓は胡適などが提唱する「新文化運動」に反対の意見を持っていた。当時は「文言文」を廃止しようとする声が多く、林紓は「白話文」の興起に反対し、「白話文」は「引車賣漿之徒所操之語」と考え、自分の意見を蔡元培に宛て手紙で述べていた。さらに、林紓は改革に賛成し「白話文」を使用している人々を「引車賣漿者流」とし、当然、その中には当時の北京大学の学長である蔡元培も含まれている。新文化運動の支持者である魯迅は、1924年に発表した『論照相之类』に「林琴南翁負了那么大的事名，就更用了引車賣漿者流的文字来做文章諸君而言，南亭亭長我佛山人往矣。」と記した。魯迅は林紓の主張に反対し、林紓自身の言葉を引用して反論していた。実は、『阿Q正伝』に記された「引車賣漿者流」には、旧思想を持つ人に対する皮肉が込められている。魯迅は増田に個人指導をした際、おそらくこの言葉の裏の意味である皮肉を増田に教えたため、増田のメモに「林紓 蔡元培」という文字が残っているという仮説が立てられる。

3. 原本の誤字の修正

増田は魯迅から熱心に講義を受けていた際に使用した『呐喊』や『彷徨』は、1930年に刊北新書局より出版された烏合叢書版である。増田のメモから考えると、この本の中にはいくつか印刷の誤字が認められ、魯迅の講義を受けた際に増田によって修正された。ここで『阿Q正伝』を例として、原文に6か所の誤字があり、増田はそれらをメモで訂正した部分を説明する。

表 3

原文	メモ
阿 Que ！	i
英國流行	英國流●
而阿 Q 在情神上	精
要牆到牆上	拖
他敢來做革命黨的罪	也
阿 Q 又跳而又停的兩三回	逃
阿 Q 也照的下跪	例

例えば、「阿 Que ！」の「i」は上下が逆になっていた。その他、増田は「英國流行」の「行」の字を消している。「阿 Q 在情神上」の「情」は「精」に、「要牆到牆上」の「牆」は「拖」に、「他敢來做革命黨的罪」の「他」は「也」に、「阿 Q 又跳而又停的兩三回」の「跳」は「逃」に、それぞれ修正された。また、「阿 Q 也照的下跪」の「照」と「的」の間には「例」が加えられた。

この部分について、1921年より最初に『阿 Q 正伝』を連載した『晨报付刊』にある版本と比較する。

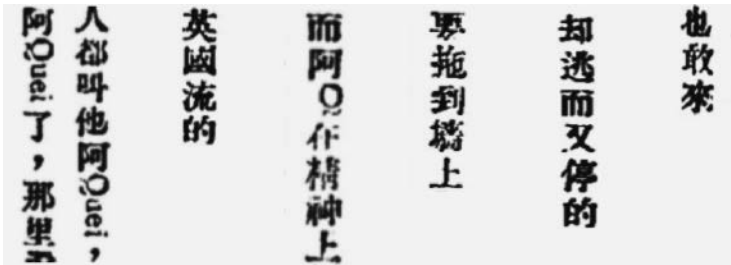


図 1

表 4

北新書局版 原文	メモ	晨报付刊版	新潮社版
阿 Que ！	i	阿 Quei	阿 Quei
英國流行	英國流●	英國流	英國流
而阿 Q 在情神上	精	而阿 Q 在精神上	而阿 Q 在精神上
要牆到牆上	拖	要 <u>拖</u> 到牆上	要 <u>拖</u> 到牆上
他敢來做革命黨的罪	也	<u>也</u> 敢來做革命黨的罪	<u>也</u> 敢來做革命黨的罪
阿 Q 又跳而又停的	逃	阿 Q 又 <u>逃</u> 而又停的	阿 Q 又 <u>逃</u> 而又停的
阿 Q 也照的下跪	例	阿 Q 也 <u>照例</u> 的下跪	阿 Q 也 <u>照例</u> 的下跪

上記の表に記載したように、増田は最初に魯迅が『晨报付刊』に連載した『阿 Q 正伝』と同

様に北新書局より出版された『阿Q正伝』にある印刷の誤字を直した。『阿Q正伝』の最初の版本は1921年12月から『晨报付刊』に連載し始め、1922年2月に終了した。その後、1923年8月に新潮社から初めて『呐喊』を単行本として発行し、その中に『阿Q正伝』が収録された。1924年、魯迅と周作人の兄弟関係の不仲が原因で、魯迅は『呐喊』の第三版の版權を新潮社から北新書局の責任者である李小峰に譲渡した。増田が魯迅の個人指導を受けた際に使用した北新書局版は『呐喊』が発行されてから第三版の版本である。しかし、その3つの版本を比較すると、1921年の『晨报付刊』版および1923年の新潮社版には誤字は認められなかった。

北新書局は1924年に北京大学の近くにある翠花胡同で設立された。設立当時の北新書局は責任者である李小峰の自宅にあり、魯迅の指導の下に、新文芸作品を主として、新文化を伝播するために様々な作品を出版した。当時の北新書局は1919年に成立した新潮社から独立したばかりで、未成熟であり成員も少なく、様々な問題を抱えていた。印刷に誤字があるのは、そのような組織的な問題が原因の1つであると考えられる。魯迅が増田に指導した際に、この版本の誤字を発見して増田に指摘し、誤字は訂正された。増田のメモは、魯迅が自分の出版した作品の誤字に気づき、それを指摘していたことをあらわしている。それによって、魯迅は自分の作品について、増田直筆メモのように直したところが認めている。

しかし、現在中国で流通している各版本の『阿Q正伝』の中には、『晨报付刊』に収録されている最初の『阿Q正伝』や増田メモで訂正されたものと異なっている部分が2箇所がある。1つは「要拖到墙上」で、現在の版本では「要拉到墙上」となっている。2つ目は、「照英国流的拼法写」で、現在は「照英国流行的拼法写」となっている。この表記の違いに関する研究は少なく、最初の版本と異なる原因は明確にはわかっていない。増田が魯迅の個人指導を受けた際に、2人は親しく文章の内容などについて議論していた。増田は質問があるところを指導され、魯迅との議論の中で先述の2箇所を訂正しメモに残しているため、魯迅は認められるのは増田メモに書いている言い方という証拠だと考えられて、そのメモに書かれている表記は現代のものと比較して当時の魯迅の考えにより近いものであると推測できるだろう。

4. その他

魯迅の著作である『中国小説史略』などの翻訳のため、増田渉が恩師である魯迅と交わした質疑応答の内容をのちに伊藤漱平と中島利郎が整理し、共編した『魯迅・増田渉師弟答問集』によって、増田の習慣を鮮明に理解できる。それによれば、増田が小説の内容について不明な箇所を魯迅に質問する際、図を用いていたことがあることがわかる。増田は図を描いて小説の情景を表すことに長けていた。よって、『呐喊』および『彷徨』の中に残されている増田のメモでも、同様に図を用いて説明している箇所が多く見られる。

『阿Q正伝』を例に挙げると、文章の内容について言葉で説明するのが困難な箇所で、小説の中に描かれている情景を図で説明していることが多い。

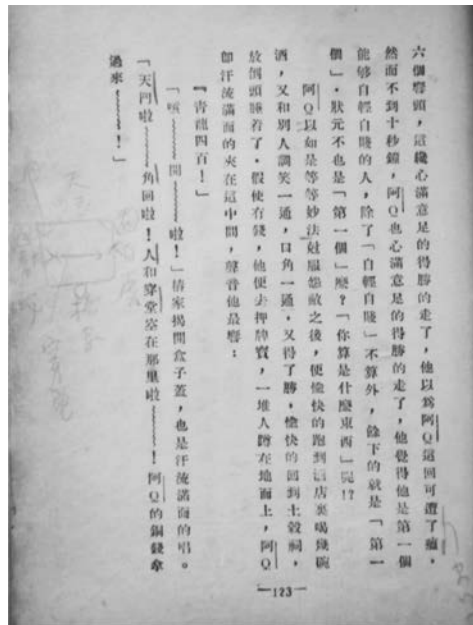


図2

上図の左側の余白に、文字以外に簡略化した図で中国の賭博の規則が表現されている。ここに書かれている賭博の規則などは、一般の中国人にわからないものであり、無論日本人である増田も知らなかったはずである。よって、これは魯迅から教えられたものであると考えられる。魯迅は賭博を全くしなかったが、一般の中国人が知らない賭博の規則を詳しく知っていたのには、以下のような要因がある。当時、魯迅は『阿Q正伝』を創作していた際にこの賭博についての場面をより現実に近い形で表現したいと考え、市井に交わ、賭博に関して労働者である王鶴照という人物に弟子入りしたことがあった。「王鶴照对于市井平民的生活非常熟悉，他也懂得賭博場上的押牌宝、搓麻将、玩竹牌的方法以及賭場上賭徒們的規矩和場面。他把自己所知道的賭博中的所有東西都津津有味讲給魯迅听，还给魯迅哼唱了賭博時唱的歌謠。魯迅像一个小学生听老师讲课一样，他一边认真听，一边用笔做笔记，还认真地提问题。（王鶴照は町中の一般人の生活に非常に知っていて、賭博場の押牌宝、搓麻将、玩竹牌などの方法及びばくち打ちたちの規則もよく知っている。彼は自分がしていた賭博の中にある全部のものも生き生き魯迅に教えて、賭博の歌謠も歌ってあげた。魯迅は小学生みたいに、真面目に聞いたり、メモしたり、真剣に質問したりする。）」¹⁾ 魯迅はおそらく王鶴照から賭博について教えられた時と同様に、詳しく増田に教えた。そして増田は、魯迅より指導を受けた内容をそのような図で表現した。

1) 王昊军 2003 『羊城晚报』

また、増田は英語でメモをしていたこともある。

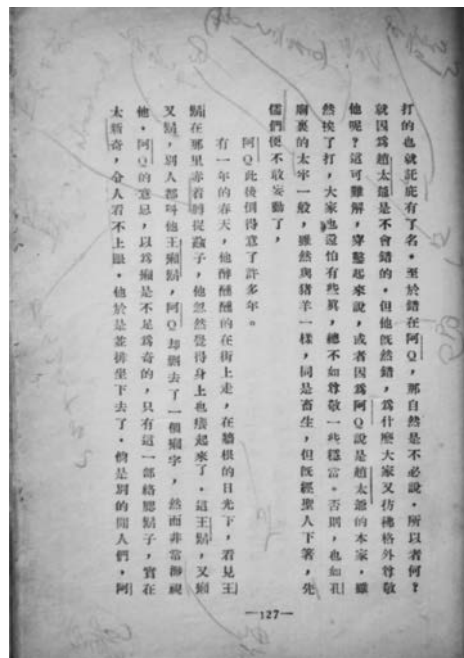


図3

上図の左上の余白、印字の「新奇」の隣に、増田は「abnormal」とメモしている。元々「新奇」という言葉は、中国語の意味と同様に「珍しい」という意味で用いられることが多いと考えられる。しかし、既に出版されていた増田の最初の翻訳作品である『魯迅選集』では、この部分は以下のように訳されている。「阿Q的意思，以为癩是不足为奇的，只有这一部络腮胡子，实在太新奇，令人看不上眼。（阿Qの意見によると、癩は奇とするに足りないものだけれども、そのボウボウと腮を包むところの鬚は実に奇怪千万過ぎる代物で、見っともなくて堪えられないものだといふのである。）」²⁾ 増田は「新奇」を「奇怪千万過ぎる」と翻訳し、「新奇」に続く部分は「見ていられない」と翻訳している。つまり、ここの「新奇」は「珍しい」という一般的な意味では翻訳されていない。おそらく魯迅が日本語でこの「新奇」の意味を説明する際に適当な言葉が思い浮かばなかったため、ふさわしい意味である英語の abnormal で増田に説明することになったと考えられる。魯迅は自らが日本語で正確な翻訳を出来ないとき、曖昧な言葉を充てて本来の意味を損ねることはせず、教師としての責任を自覚し、ときには英語も用いて

2) 増田 渉 佐藤春夫 1935 『魯迅選集』

正確な意味や解釈を増田に教えていたことがわかる。

また、増田は文章に出た難しい漢字を隣に練習して書く場合もあって、字がくずして意味不明なところも多いである。増田の直筆注釈メモを通じて、増田本人の筆記習慣、魯迅との関係などいろいろ再現できるだろう。

二 注釈メモが増田渉の翻訳活動に与えた影響

1. 注釈メモが参考になる状況の分析

増田渉は魯迅の個人講義を受けたことがあるため、それからの翻訳活動に魯迅から受けた影響は大きく、増田はある程度残っている直筆注釈メモを参考にしていた。

本研究では、『阿Q正伝』を例として、原作で表現されている中国の文化を含むと考えられる言葉を選び、増田の翻訳状況についての研究対象とした。また、筆者の調査によって、それらの言葉を細かく分類すると、『現代漢語辞典』³⁾と『古代漢語辞典』⁴⁾のいずれにも存在していない言葉があった。このような言葉は魯迅が『阿Q正伝』を創作した時代の特徴的なもので、魯迅の言葉遣いの習慣も含まれており、研究対象とする価値がある言葉だと考えられる。また、北京大学中国語言学研究中心のコーパスに従い、魯迅の『阿Q正伝』の文章のみで使われている言葉と、『阿Q正伝』が創作された時代の作品に使われている言葉は18個があった。⁵⁾そして、筆者は増田の直筆注釈メモを整理して、以上の条件で選んだ言葉の中に、増田が魯迅に直接講義を受けて書いたメモに残っている言葉は幾つがあることを見出した。以上の条件を総合して考えると、研究対象として16箇所の言葉を選ぶことができ、それらにより増田が直筆注釈メモをどのように参考にしていたかを分析する。ここでは、『阿Q正伝』の原文、増田直筆メモと増田訳1935年岩波文庫版『魯迅選集』を比較して例を挙げる。

表 5

原文	メモ	『魯迅選集』
土穀祠	穀物の神	穀物神の祠
哭喪棒	葬式のとき人が死んだとき 霊がもつ杖	葬式棒
照壁	壁つ照壁（図）	白壁
大搭連	帯に挟む紙	大紙入
堂倌	給士（小僧）	小僧
庭訓	オヤヂの訓る	庭訓

3) 現代漢語詞典第6版 2012 中国社科院語言研究所編 商務印書館

4) 古代漢語詞典第1版 1998 古代漢語詞典組編 商務印書館

5) 陈娟 2014 「『阿Q正伝』三つの訳本から時代性の保持について」

保険燈	つりランぷ	吊りランプ
門幕	カーテン	暖簾
轉折親	まわり まわっての親類	廻り廻ッテ親類
鳥男女	ロクでもない人間	ロクでもない人間
洋炮	鉄砲	鉄砲
鈎鎌槍	鎌槍	鎌槍
大紅洋紗衫	赤	真赤
三百大錢九二串	二分引 九二枚を百トスル 92x3	穴錢九十二串を三つ（二百七十六文）
寧式牀	寧波式	寧波式（寧波は地名）寢臺
龍牌	龍の模様ある	龍の模様ある石碑
搭連	紙入	紙入

上記の表は筆者が選択した『阿Q正伝』原文、増田直筆注釈メモと増田が翻訳して出版された『魯迅選集』を比較したものである。上記の比較に基づき、参考になるため、増田と同時代に井上紅梅が1928年に初めて『上海日日新聞』という上海の日本語新聞に発表した『阿Q正伝』の訳本とも比較を試みる。井上紅梅の訳本は、原作の作者である魯迅から好評を得られなかったのみならず、1932年に改造社から刊行された『魯迅全集』にて、魯迅に「実にひどいやりかただ」という酷評を受けたことがある。しかし、井上版と増田版はほぼ同じ時代の翻訳作品であり、原作の作者である魯迅から直接評価を受けたことがあるため、増田の訳本と比較して本研究の資料として比較するのに最も適していると考えられる。それでは、増田が翻訳した1935年に出版された『魯迅選集』と1961年の角川文庫版『阿Q正伝』を、井上訳と比較して分析する。

以下、上記の表の言葉から「土穀祠」、「大搭連」、「轉折親」を選び、詳しく分析していく。

例1：「土穀祠」

【原文】阿Q没有家，住在未庄的土谷祠里。（『阿Q正伝』人民文学出版社 魯迅 2009年）

【増田訳】阿Qには家がない、未莊の穀物神の祠に住んでいる。（『魯迅選集』岩波文庫 増田渉訳 1935年）

【増田訳】阿Qには家がなく、未莊の土地神の祠に寝起きしていた。（『阿Q世伝』角川文庫 増田渉訳 1961年）

【井上訳】阿Qは家が無い、未莊の土穀祠の中に住んでいて、…（『阿Q世伝』井上紅梅訳 上海日日新聞 1928年）

例1の「土穀祠」は、かつての中国に於ける土地神廟と五穀神廟を指し、現在は特に土地神の廟「土地廟」とであると言われている。土地廟はまた「福德廟」、「伯公廟」という、中国の民間にて土地神を供えるところである。建造することが容易で、建物の規模はそれほど大きくな

く、中国で最も数量が多く、非常に広く分布している。日本では「地主神」という土を保護する神が存在しているが、「土地廟」にあたる建物は存在しない。増田の直筆メモからみると、増田は「土穀祠」の隣に「穀物の神」と書いて解釈している。魯迅の故郷である紹興に小さな土穀祠があり、魯迅の生家から近く、『阿Q正伝』に何度も登場している。増田の直筆メモでは「穀物の神」と書かれており、やはり魯迅は「土穀祠」を「穀物の神」を祀る場所として増田に教えたかと推測できる。

これにより、増田は1935年の『魯迅選集』に「土穀祠」を「穀物神の祠」と魯迅より教えられたように詳しく翻訳している。そして、その後増田は1961年の角川文庫版の訳本にて「土地神の祠」に変更した。現代の中国では意味は変わってないが、「穀物神」より「土地神」としたほうが、日本でも土地を守る神が存在しているため、日本人にとってさらに理解しやすいと考えられる。増田の解釈を通じて、魯迅の祖国である中国における土地の神を祀る場所が存在していることを示し、読者にこれらは古くからすでに存在しているものであることを想像させている。

一方、井上は「土穀祠」のままで訳している。当時の書物では漢語、漢字の使用頻度が高く、外来語の翻訳も漢字で表す時代であったため、原文のままで使用しても読者にとっては理解できると考えたからであろう。しかし、時代の変化につれ、このような翻訳方法は読者にとって理解しにくくなっている。「土穀祠」のまま使用すると、どんな神を祀る場所であるか、読者の理解が得られない可能性が高いだろう。

増田は直接魯迅の講義を受けてから、「土穀祠」という言葉を詳しく理解し、土地の神を祀る小さな建物と翻訳している。これにより、当時の人々がこの祠という古い建物で穀物の神や土地の神様を拝むことを的確に表現し、読者の感知を誘導しやすいと考えられる。

例2：「大搭連」

【原文】…穿的是新棉袄，看去腰间还挂着一个大搭连…（『阿Q正伝』人民文学出版社 魯迅 2009年）

【増田訳】…着てゐるものは新調の袷の上衣だ、見れば腰間には大紙入を挟んでゐる…（『魯迅選集』岩波文庫 増田渉訳 1935年）

【増田訳】…着ているのは真新しい袷だし、見れば腰のあたりには大きな紙入が吊りさげられる。（『阿Q正伝』角川文庫 増田渉訳 1961年）

【井上訳】新しい袷を着て腰の辺には大搭連がどっしりと重みを見せ…（『阿Q世伝』井上紅梅訳 上海日日新聞 1928年）

「大搭連」という単語は現代の中国語にはないが、当時使用されていた、中に仕切りがあり、両側に物を入れる長い袋のことである。通常は腰にさげ肩から吊す財布として使用するものであった。原文では、阿Qが城内に帰り、大金を儲けて袋の中に全部お金を入れ、ずしりと腰に

掛けている姿が描かれている。すなわち、ここの「大搭連」は財布の意味として用いられている。増田の直筆メモでは、「大搭連」を「帯に挟む紙」と解釈している。日本の江戸時代に「紙入り」という外出する際に必要な小間物を入れて携帯する用具があった。二つ折り、または三つ折りの入れ物で、近代になってから、紙入れがお金を入れるもの、すなわち財布として使用されるようになった。

魯迅は「大搭連」を「帯に挟む紙」と説明したが、現代の「搭連」の中国語で解釈する意味と少し異なり、日本にある「紙入り」の方により近いと考えられる。さらに、『阿Q正伝』の後文に再度「搭連」が登場し、そこでの増田の直筆注釈メモは「紙入」と書かれているため、おそらく増田は魯迅の解釈を聞き、日本人に馴染みのある「紙入り」と解釈したほうが適していると考え、魯迅も「搭連」は「紙入」とあるという解釈を認めたのだろう。そして、増田はその後の訳本に「大搭連」を「大紙入」や「大きな紙入」と翻訳した。増田は魯迅の説明を参考とし、原文の意味を理解したうえで、江戸時代に流行した「紙入れ」を訳語として採用し、原作の時代感を表現しようとした。それにより、読者が理解しやすくなるように翻訳していると考えられる。

井上の訳では「大搭連」をそのまま用いて翻訳している。このような翻訳によって、外国の作品であること、登場人物が外国人であることを強調しているが、読者が理解できない可能性があり、「大搭連」が古い時代のものであることをイメージさせない、あるいは原作の時代感など小説の情景を思い浮かべにくいと考えられる。

例3：「轉折親」

【原文】 说举人老爷似乎没有亲到，却有一封长信，和赵家安排了“转折亲”。（『阿Q正传』人民文学出版社 魯迅 2009年）

【増田訳】 舉人旦那は自分で来たのではないらしいけれども、一封の長い手紙を寄せて、趙家とは「廻り廻って親類」だといった…（『魯迅選集』岩波文庫 増田渉訳 1935年）

【増田訳】 舉人旦那は自分でやって来たらしくないが、しかし長い手紙を寄越して、趙家とは「廻り廻って親類」だといったのである。（『阿Q正伝』角川文庫 増田渉訳 1961年）

【井上訳】 舉人老爺は自身たわけではないが長い手紙を寄越して趙家と「仲直り」をしたらしい。（『阿Q世伝』井上紅梅訳 上海日日新聞 1928年）

原作の「轉折親」は、魯迅が生きた時代の浙江紹興あたりの方言で、血縁が遠い親族という意味である。原文の意味は、舉人旦那と趙旦那が平素ほとんど連絡をとらないが、舉人旦那はただ一通の手紙を書いて、趙旦那との間で多数の関係者と繋がっていたため、実は遠い親戚であるということを示している。上記の表に示したように、増田の直筆メモでは「轉折親」を「まわり まわっての親類」と書いているので、おそらく魯迅が講義した際に教えた通りの「轉折親」の意味であろう。そして、増田は1935年の訳本『魯迅選集』に、魯迅より教えられた通り、

「轉折親」を「廻り廻って親類」と翻訳して出版した。その後、1961年の角川文庫版の『阿Q正伝』では文章は少し変わったが、「轉折親」についての翻訳は岩波文庫版の翻訳から変化なく、「轉折親」と一致している。魯迅は原作にて、封建官僚の間で利益を求めるため、実際はあまり親しくない人にも、親戚のようにへつらうというようなかつての社会でよくみられた慣習を風刺している。「轉折親」を「廻り廻って親類」と訳したのは、意味から考えると非常に適した翻訳で、魯迅の時代の慣習を読者の目の前で再現しているといえる。

だが、井上は「仲直り」と翻訳した。しかし、原文の文脈から考えると、舉人旦那と趙旦那はもともと知り合いではなく、魯迅の本意は関係ない2人が利益を求めるために親戚になるように不正をはたらいたことを批判し「轉折親」を用いた。したがって、「仲直り」という意味とは全く関係ない。更に、もともとお互いに知らない2人は「仲直り」することはない、と客観的に捉えることもできるであろう。

「轉折親」の例から見ると、魯迅は直接増田に自書の文脈を説明し、このような難しい言葉の意味を教えたため、日本人でありながら増田は中国語の方言である言葉を的確に理解し、正しく翻訳できたのだろう。増田は魯迅の個人講義を受けたことがあるからこそ、もともとの「轉折親」という言葉の意味を知らずして、親類だと認められるような中国のかつての社会の悪習を意識して翻訳することができた。井上の翻訳は不適合だとわかり、魯迅から酷評を受けた原因がないではないと認められるだろう。

以上の例から見ると、増田は直接に原作の作者である魯迅の個人講義を受けたことがあるため、前述のように当時の中国の社会背景が含まれている難しい言葉、時代性が含まれている言葉、魯迅の個人的な言葉遣いの習慣と魯迅の故郷にある方言など外国人の訳者にとって理解が難しい部分に関して、増田は他の訳者と異なり、魯迅の意図を的確に汲み取り、原作の意味をより正しく読者に伝えた。増田の翻訳活動に於いて魯迅から受けた影響は非常に大きく、残っている直筆注釈メモや魯迅の説明を参考にすることで、難しい言葉の意味を理解したうえ、原作の時代背景を表現しようとしていた。そのような努力により、読者が理解しやすくなるように翻訳していると考えられる。

2. 魯迅の翻訳観が増田渉に与えた影響

1909年に魯迅が実弟の周作人と共訳した『域外小説集』は、中国近代翻訳史および文学史において重要な地位を占めている。特に魯迅が執筆した「域外小説集序言」と「略例」は「中国近代译论史上的珍贵文献（中国近代訳論史に貴重な文献である。）」⁶⁾と認められる。『域外小説集』は魯迅の翻訳観の転換点として、「奠定了魯迅「直译」的风格，在随后几十年翻译里，魯迅便一直信奉着这样的一种直译意念。（魯迅の「直訳」の風格を定め、その後の数十年の翻訳活動

6) 陈福康 1992 「中国译学理论史稿」 上海外语教育出版社 P171

に、魯迅はずっとこのような直訳理念を信じている。)⁷⁾。しかし、1906年に翻訳された『地底旅行』と『造人術』の翻訳方法は非常に異なっていた。従って、1909年に『域外小説集』が出版されるまで、魯迅の翻訳観は明らかではなかった。なぜ魯迅は最終的に「直訳」の理念を選択したのだろうか。この問題を明らかにすることで、魯迅の翻訳観を把握することができると考えられる。

魯迅の「訳経意識」は中国、西洋、日本の3つの面から形成されたと思われる。

前文のよって、魯迅は1909年に翻訳した『域外小説集』から「信而不順」な「硬訳」という理論を提唱して、その後度々批判されたが、始終「硬訳」の方法を用いていた。

魯迅在清末民初首倡「直译法」，意在引入「异域艺术新宗」，更有以古人严肃认真的译经态度来翻译域外文学艺术作品的意识，这就是他的「译经意识」。(魯迅は清末民初に初めて「直訳法」を提唱し、「異域藝術新宗」を導入しよう意味である。さらに古人の厳肅で真面目な態度で域外の文学芸術作品を翻訳する意識を持って、それは彼の「訳経意識」である。)

中国の仏經の翻訳や西洋の聖書の翻訳でも、始終直訳法を用いている。Walter Benjaminは『The task of translator』の中で、「The interlinear version of the Scriptures is the prototype or ideal of all translation.」という見解を提唱した。「訳経意識」というのは、翻訳の態度であり、文化に対する態度である。訳経者は仏經や聖書などの宗教文献は神聖にして侵すべからずとし、原文に対する尊敬の念を抱いて翻訳してこそ、經文を汚れなく、原作の意味に忠実に翻訳することである。

また、「魯迅の译经意识是对晚清以林紓为代表任意删节的「意译」风尚的不满和纠正中逐步形成的。(魯迅の訳経意識は晚清の林紓を代表する任意に添削する「意訳」風潮な不満や修正の過程に形成したことである。)」⁸⁾ その不満について、魯迅は1932年1月16日に増田渉に送った手紙で以下のように書いていた。

『域外小说集』发行于1907年或1908年，我与周作人还在日本东京，当时中国流行林琴南用古文翻译的外国小说，文章确实很好，但误译很多，我们还对此感到不满，想加以纠正，才干起来的。(『域外小説集』は1907年か1908年に発行され、当時中国は林琴南が古文で翻訳した外国の小説が流行っていた。文章は確かに良いが、誤訳が多く、私たちはそれについて不満に感じ、修正したいと考えるこそ、やったことにする。)⁹⁾

7) 王宏志 2010 「翻译与文学之间」 南京大学出版社 P280

8) 李文革 2005 「译经意识：鲁迅的直译法」 求索 P181

9) 徐文斗 徐苗青 1995 『鲁迅选集书信集』 山东文艺出版社 P392

しかし、魯迅の翻訳活動は日本より始まり、翻訳観の大枠も日本で形成された。そのため、魯迅が日本に留学した時期の翻訳思潮、特に明治時代の代表的な翻訳家の翻訳観を解釈することも必要であると思われる。

森田思軒（1861-1897年）は、日本のジャーナリスト・翻訳家・漢文学者である。本名は森田文蔵で、慶應義塾で英語を修めた際に、後に翻訳者として活躍するための素地が作られた。1882年に新聞社である報知社に入社し、小説欄の担当として、そこで発表した海外作品の翻訳は好評を得た。なお、フランス語作品の翻訳は英訳からの重訳を行っていた。森田は日本の近代翻訳史に大きな影響を与えたと考えられる。

……古くは、内田魯庵の「翻訳熱流行を望む」（『国民新聞』、明治二三年七月）という文章や岩城準太郎の『明治文学史』（育英舎、明治三九年一二月）などにもその影響の跡が認められるし、昭和に入っては、本間久雄の「翻訳文体の三種」（『日本英文学史』、昭和一六年一〇月）などにもそれを認めることができる。とりわけ、思軒の論考に強く影響をうけたと思われるのは明治翻訳文学研究の草分け的存在ともいえる柳田泉で、彼は日本の翻訳文学研究に一大転機をもたらした『明治初期翻訳文学の研究』という書物のなかで、ここで思軒が示した状況分析をほとんどそのまま踏襲して、初期翻訳文学の分析を試みている。……思軒は、日本の文学環境を一新する西洋の芸術作品を紹介した点で、またそこに見られる「精緻ノ思想」を写し取る新しい「訳文体」を創出した点で、二葉亭同様、初期の翻訳文壇に欠かすことのできない存在であった。¹⁰⁾

森田は西洋の文体をそのまま模した欧文直訳体を採用し、翻訳に際してなるべく易しい単語を用い、日本語や中国語に固有の表現や言い回しを避けなければならないと考えていた。用いる漢字一字一字に細心の注意を払わなければならないと、それは厳密にその用法に沿う必要がある。そして、森田はこれらの翻訳と並行して、「翻訳の心得」や「翻訳の苦心」といった論説を発表し、翻訳に当たる際の心得やこれからの文章のあるべき姿を明らかにした。その中には、中国の仏經の翻訳方法も含まれていた。

支那人は印度の仏經を訳するときに、随分当代の能文の士が集まって訳したのでありませうが、もし其の言葉の意味に従って言葉の筋に関係せず支那の文章に写すのなれば、そんなに苦労は無かつたらうと思ふです。然るに、当時の翻訳は啻に其意味を取るばかりでなくして、言葉の姿も合わせて取らうとしたと見えて、其の翻訳文が一種支那固有の文章と違った姿を見せたものとなったのです。……その訳文が支那固有の言葉の姿と甚だ相違

10) 川戸道昭 2002 「初期翻訳文学における思軒と二葉亭の位置——その文体を中心に——」 P339～P340

して居るのによって、定めて原文の姿を保存する事に力め、又幾分かその言葉の姿を保存したのであらうと考へるのです。もし然らずんば、アアいふ支那固有の文体とは全く違つた文体が生まれ出ないだらうと思ふのです。

森田が以上のような考えを持っていた原因は、作品の翻訳をしていた際に、様々な日本語の問題を発見したためであった。

第一に困難を覚えたのは言葉の不足なのです。……例へば人の坐わる道具でも、古い所で円座、新しいもので座布団といふ位より外には、さう沢山の道具がありません。しかし、西洋では同じ道具にチャもあればベンチもある。イージーチャもあればソファもあるといふやうな訳で、あちらの品物を取って日本の某の品物に対照しやうと思つても、日本に其の品物のないといふ事が多い。

魯迅は1903年6月に、森田の日本語訳本から、ヴィクトル・ユーゴーの作品「哀塵」を中国語に翻訳した。森田思軒は魯迅が関心を寄せていた日本人の翻訳者の一人であり、魯迅の翻訳観は森田と類似するところがあると思われる。

中国的文法、比日本の古文还要不完备，然而也曾有些变迁，例如『史』、『汉』不同于『书经』，现在的白话文又不同于『史』、『汉』；有添造，例如唐译佛经，元译上谕，当时很有些「文法句法词法」是生造的，一经习用，便不必伸出手指，就懂得了。现在又来了「外国文」，许多句子，即也须新造——说得坏点，就是硬造。（中国語の文法、日本の古文よりも完全ではないが、少し変遷したことがある。例えば『史』、『漢』は『書経』と異なり、また現在の白話文は『史』、『漢』と異なる。添削があり、例えば唐訳の仏經、元訳の上諭、当時にある「文法句法詞法」は作ったもので、習用すれば、手が出さなくてもわかる。また現在は「外国文」が来て、たくさんの文章も新しく作らないといけない——悪く言えば、無理やりに作ることである。）

魯迅と森田の翻訳観を比較すると、直訳を重視するという点に於いて、ほぼ一致すると考えられる。ただし、魯迅の日本留学時代に、森田の仏教の翻訳理論で日本語翻訳を改善すべきであるという主張は現実になり、魯迅の参考になった。

ここで、魯迅の直訳の例を挙げる。

例1：

【原文】 だって、毎日こんなに太陽が海に沈むのは、だいいち不経済ではありませんか。

【魯訳】然而，每天这样的太阳沉下海去，第一岂非不经济么？（「池边」）

例 2：

【原文】…反対に、トルストイは個々の目的の平凡さに対するよき本質の勝利、人類と宇宙との一致をば彼以前の如何なる詩人もなし得なかった位の、総てを征服する様な熱情を以て賛美してゐる。

【魯訳】但托尔斯泰将对于个个的目的的平庸的，好的本质的胜利，以及人类和宇宙的一致，却用了他以前的怎样的诗人也做不到的，征服一切那样的热情，加以赞美的。（「托尔斯泰之死与少年欧罗巴」）

以上の例をみると、魯迅はほぼ全ての言葉を一字一句対応して翻訳しているため、訳文はあまり自然ではなかった。ここに魯迅の直訳の特徴が非常に鮮明に現れている。

これより、魯迅の翻訳観が増田渉の直筆メモにどのような影響を与えているか、分析を試みる。

表 6

原文	メモ	『魯迅選集』1935 増田渉訳	『大魯迅全集』1937 増田渉等共訳	『魯迅選集』1956 竹内好訳
活夠了	もうたくさんだ 足ル	あまり長生きだ	長生きし過ぎだ	存分に生きましたわ
敗家相	家を破壊する様子	やくざな行儀	やくざな行儀	おちぶれてゆくザマ
多喜歡用秤稱了轻重	すきだ	大てい	大てい	ことが多い
一條顛撲不破的實例	殴ってもやぶれない	挺子でも動し難い	動かし難い	動かすべからざる
飛黃騰達的意思	意味	意向	意向	野心
就會長出辮子來嗎	出てくるか	伸びる	伸びる	はえてくる
輕易是不常穿的	やういに	めったに	めったに	ちょっとやそっと
砸爛他酒店	叩きこわす	大あばれをした	ぶちこわした	大あばれをやった
多事	ものずき	おせっかい	おせっかい	おせっかいすぎる

以上は「風波」に残っている魯迅の直訳観を垣間見ることのできる増田のメモである。魯迅が講義する内容としては、増田が読みにくい字句の解釈を教えたり、字句や内容などについて理解できない部分を説明したりすることであつた。それらの言葉だけから見ると、意味が間違っているわけではないが、魯迅は中国人として、特に自分で書いた文章なので、それらの字句は文脈を合わせることができた。上記の表の通り、魯迅は一字一句に対応させて、中国語の元の意味を増田に教えていた。例えば、「多喜歡用秤稱了轻重」では、中国語で「喜歡」というのは増田のメモの通り、「好きだ」という意味で間違っていない。しかし、文脈でこの文の意味

は日本語で「みんなは大体秤で生まれた子の体重を計ること」、「秤で体重を計ることが多い」というのがふさわしい翻訳であると考えられるが、魯迅は直訳で「すきだ」という日本語訳を選んで、増田に教えた。

増田のメモによって翻訳すると、おそらく魯迅の翻訳作品と同様に、難解な文章となるだろう。増田が翻訳した2つの版本で用いられた言葉はメモと異なっていたが、のちの竹内好の版本より、元の魯迅の意味により近いものとなった。

終わりに

魯迅が増田に教えた字句の解釈の方法は、魯迅の翻訳観と密接に関係する。よって、『呐喊』と『彷徨』に残されている増田の直筆メモを解釈することによって、魯迅の「直訳観」に関するもう1つの有力な情報を得ることができると考えられる。さらに、魯迅の「硬訳」という翻訳観は増田のメモに直接に影響を与えたので、そのことも同時に明らかになると考えられる。そして、増田の以後の翻訳活動に大きな影響を与えたことがわかると思われる。

増田は魯迅の個人講義を受けてから数年間で、魯迅の作品の翻訳活動に力を尽くし、最も適当な翻訳方式を探求していたと考えられる。その過程で、魯迅と議論した際に書き残した直筆メモは、重要な役割を果たした。おそらく、増田はその後の翻訳活動にて当時のメモを参考しながら、魯迅が執筆した際の意図を熟慮し、できるだけその意図に沿うように翻訳しようと努力していた。それは学生として、恩師に大いなる尊敬の念を抱いている証拠であると考えられる。